



Title	周作人の新村提唱とその波紋(上)-五四退潮期の文学状況(1)
Author(s)	尾崎, 文昭
Citation	明治大学教養論集, 207: 119-136
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/8878">http://hdl.handle.net/10291/8878</a>
Rights	
Issue Date	1988-03-01
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

# 周作人の新村提唱とその波紋（上）

——五四退潮期の文学状況（一）

尾崎文昭

五四退潮期といわれる時期の文学状況については、以前から整理をしたいと考えていた。ただ、当初、魯迅の文章のうち当時の状況を回顧したもの及びそのさなかに書かれたものからひどく荒涼とした感じを受ける一方、当時新進文芸批評家として登場した茅盾の文章からは、逆に文学運動の着実な進展の響きが感じられ、この二種の印象の落差に戸惑って、それ以上考えを進めることができなかった。人により見地を異にするのは当然とはいえ、この落差は少々大きすぎるし、それ以外際は一体どうだったのだろうか。中国近代史の本を読んでもなかなか納得いかない。五四退潮期はちょうど中国共産党の建党期にあたり、歴史書はそのことを述べるに熱心で、当時の知識人の頭を支配していた一般的思想状況については僅かにしか言及しない。つまり、茅盾の言に似ている。逆を言えば魯迅の表現が非現実的であるかのように見えることになるが、簡単にはそうと信じかねる。他の材料、例えば、茅盾とともに文学運動の若きリーダーであった鄭振鐸の言はむしろ魯迅に近い。<sup>1</sup>このような訳で、頭の隅に棚上げしたまま久しいこと、これに直接は言及しないで来た（中国近現代史研究の方面では最近事情も多少変わってきているようで、このことについては（下）で紹介する）。ともかく、機会あることに当時の雑誌を見ていくうちに、明瞭な像を結んだとは未だなかなか言えるに至らないが、ようやく少しづつその輪郭が見えてきたように思う。

もし簡単に先程の魯迅と茅盾との落差を説明するとすれば、各種の政治的動きもった可能性はどうあれ、表面上は沈滞鬱屈した不透明な状況、社会改革の方策と実現性とに共通の展望を持ちえなくなっている状況のなかで、魯迅は、『新青年』同人の分解を惜しみ且つは自己の思想的迷いに引きつけて状況を語り、一方茅盾は、当時新文学をリードしているという氣概に溢れていたのだし、彼が編集を始めた『小説月報』が新文学の興隆に果たした意味を大きく認めたいのだろうし、そもそも共産主義者である彼の歴史発展史観から見て、表面的な「プチブル的」な思想状況を軽々しく追認するよりは、発展の軸の上で見ていくべきだと考えた、といった具合だったのだろう。

筆者は、その辺りの事情を、一つは文壇状況から、一つは主要な作家の意識から、整理していくつもりであるが、その前に、周作人に即して言えば彼の「新しき村」の宣伝と提唱について整理を終えておかねばならないと感じており、本稿でこの作業を果たすつもりである、つまり、本題に入るもう一つ手前の準備作業ということになる。

## 一

中国現代史の幕開けと一般に見なされる五四運動（一九一九年）に先立ち、雑誌『新青年』上で五四運動を思想的に準備した主要な啓蒙活動が展開されたが、その中で胡適による「文学革命」つまり言文一致の提唱に対し、清新なヒューマニズムを主張して「文学革命」に実質的内容を与えたのが、周作人と魯迅の周氏兄弟、なかでも弟の周作人であったことは周知のことである。とりわけ、新文学の備えるべき内容とその方向性を明瞭に指し示した〈人的文学〉〈平民的文学〉〈新文学的要求〉、さらに新文化運動に提言した〈祖先崇拜〉〈思想革命〉などの論文が果たした大きな功績については、改めて言うまでもない。社会思想史の観点から見て新文化運動に与えた影響の大きさとという点でいえば、「新村（新しき村）運動」の提唱もこれに劣らず、当時の青年に与えた影響の大きさは並々ならぬものであった。最近明らかにされたところでは、毛沢東

も新村建設を試みたほどである。このことについては(下)で触れる。

周作人が言文一致の提唱に呼応して口語体文で書き始めたのは一九一七年九月のことだが、それ以前に、彼および魯迅には、すでに十余年にわたって翻訳・文芸評論・社会評論・児童文学に関する論文・その他を相当量発表した経歴があった(ただ、その活動が時代と歩調を一にしなかったために、社会的影響力を持たなかった)。その間に体得したヨーロッパ近代の学識とヒューマニズムの精神で、より深化され明瞭化されてはいても原理論としては再度、この時啓蒙的発言をしているのだが、それが清新な感動を人に与えたというほど、彼ら兄弟は時代に先んじていたのであった。

周作人は口語体文で書き始めて以来、新文化運動の中心誌《新青年》にほとんど毎号、さらに周辺の誌紙にも相次いで文章を発表していくが、詩・小説・評論の翻訳および日本近代文学史に関する講演記録を別にして、彼自身の文章という点でいえば、《読武者小路君所作一個青年的夢》(第四卷第五号、一九一八年五月)が最初となる。この紹介を受けて魯迅が武者小路作の戯曲『或る青年の夢』を全訳したことは今は触れぬこととして、周作人が武者小路実篤紹介から始めたというのは誠に示唆的なことであつた。

この文章には、発言を始めたばかりだからであろう、言ってみれば及び腰に似た歯切れの悪さがある。まず冒頭にこう前置きする、国民の理解能力が信じられず、問題が大き過ぎまた早すぎると思つてこれまで立論を控えてきたが、最近、武者小路実篤の戯曲『或る青年の夢』を読んで極めて強い感銘を受け、「その為すべからざるを知りてしかもこれを為す」ことの必要を覚えた、たとえ力不足で成果を期すことが難しかろうと、やはり言いそして実行しなければならぬ、現在は役に立たないとはいへ、将来の種を蒔くことはできるだろう、と。つまり、まずは民衆不信から出発する。問題は戦争をいかに克服するかだが、その方法として、まずロシアのトルストイの無抵抗主義をあげ、さらにガルシン・アンドレーエフ・クープリンに触れ、後二者についてはその思想が「人間」の普遍性に依拠したものであり、結局はトルストイ派の人であること

を簡単に述べる。そして、好戦的であった日本にも人道主義の傾向が強まっております。お少数とはいえ希望が持てる、武者小路実篤の『或る青年の夢』がその代表であると紹介している。今の国家のもとでは戦争はなくなる、民衆の力で国家を改めなければならない、民衆が目覚めて人類の立場で手を結ぶれば永久の平和が得られる、と訴えている。最後は、「言っても無駄だ」と明らかに解っていないながら、人類に対するこの「愛」が存在するがゆえに、言わないわけにはいかない。……この問題は大きすぎ早すぎるのではないかとは思いますが、しかし、今のままにしておくこともできぬから以上書いてみた。青年がもしこの問題にいささかでも注意を払ってくれば、満足である。

で終わっている。以上に見られるのは、国家の立場よりも人類の立場を優先する人道主義への共鳴と、戦争を阻止するための条件である民衆の覚醒についての疑いである。

のちに、「若気の至り」であったとか「夢想家」であったとかと否定するに至る、この時期の一連の理想主義的啓蒙活動は、事実上この一文から始まった。

この時期に発表した文章のうち、文学史から見ても大きな役割を果たしたのは無論『人間的文学』(『新青年』第五卷第六号、一九一八年一月)で、これは新文学の綱領的文獻となった。この論文において周作人は、自然で健全な人間性が発展することを求め、自己愛から人類愛へ直接拡大することを求め、封建的人間観・非人間的文学観を批判し、そういう人道主義に基づく文学「人間的文学」を提唱したわけだが、同時につまり「人間的道德」「人間的生活」を求め、言わば新倫理の提言としての性格をも持っていた。『平民文学』(『新文学的要求』)がこれを文学の方面に展開したのだとすれば、『祖先崇拜』(『思想革命』)はこれを思想の方面に展開したものであり、「新村運動」はこれを思想運動・実践試行として提唱したものであった。「新村運動」を別の言葉で言えば「人間的生活を送ろう」ということだから、言葉の上から見ても「人間的文学」の提唱と連続したものであったことが判らう。その内容を一言で言えば、人類主義的世界主義的人道主義ということ

になる。

「新村運動」の提唱が武者小路実篤の直接の影響下でなされたこと、そして口語体文の最初の評論が『或る青年の夢』に感銘したことを契機に書かれたこと、「新村運動」が他の啓蒙的活動と有機的関連性を持っていることを考えると、(人)的文学の執筆についても何らかの影響関係が当然にも考えられてよからう。むしろ、武者小路実篤の文学に見られるエゴイズムの肯定そして自己表現の強い欲求は、周作人の倫理的な個人主義の主張と重なりながらも同じでない。自己愛から人類愛への図式は一致するが、武者小路実篤から来たものどとはなかなか言えなからう。動物から進化した人類の持つ両面性を自然なものとして肯定し、その霊肉一致の必要を英国詩人ブレイクをもちだして言う言い方、「人間」の発見のあとさらに「女性と子供の発見」が必要だという主張、非人間的文学の例に淫書をあげて人間的文学との区別を言う性心理学的関心のもちかた、各国の文学作品を縦横に例示する博識ぶり、津田左右吉などを引用して祖先と子孫の関係のありかたを言う等等、周作人らしい発想と表現はいくらもあつて、武者小路実篤の論の焼き直しではないことは明瞭である。しかし根底において、彼に触発されていることを否定できない。かつて細谷草子氏が、実篤の『「自己の為」及びその他』との類似性を指摘し、周作人が(人)的文学の執筆時にこの文を念頭に置いていたことは疑いなく書いておられる。<sup>(2)</sup> そうかもしれない。ただ、『「自己の為」及びその他』が自己愛と各種の本能の調和を言うだけであること、発表が五年余り前(一九一二年二月、『白樺』三巻二号)であることから見て、やや問題を残す。

これまでに公表された《周作人日記》<sup>(3)</sup>を参照すると、『白樺』は一九一二年から一九一五年末までは定期購読している。だから『「自己の為」及びその他』は確実に読んでいる。『白樺』発刊の一九一〇年から一九一一年の間は日記が存在しなくと判らない。また一九一三年三月には、『お目出たき人』を二度目読したとの記載がある。『或る青年の夢』が分載された一九一六年は未公表で不明。しかし、一九一七年の日記には『白樺』購読の記載が全くない。彼がまだ紹興にいた一〜三月の

間、以前から定期購読していた丸善の『学鑑』や夫人信子と子供用であろう『婦人世界』『幼年の友』は依然購読しているにもかかわらず。北京に出てきた四月以降、日本文学関係では夏目漱石の『我が輩は猫である』を読んだとの記載以外ほかになにもなく、ロシア・ポーランドの小説やアンデルセン・チェーホフ・ワイルドなどのもの、また民族学関係の書を読んでいる。このように『白樺』関係の記載が絶えていたあと、一九一八年四月になって急に、『或る青年の夢』（一九一七年一月、洛陽堂）を手にいれ、すぐ二日で読み終えたことが記されており、その後一月余りで『読武者小路君所作一個青年の夢』が発表されている。その後、武者小路実篤の『小さき世界』（一九一六年四月、新潮社）『小さき運命』（同一年一月、洛陽堂）『新しき家』（一九一七年五月、新潮社）を立て続けに購入して読み、十月に『白樺の森』（合著、一九一八年三月、新潮社）を購入して読み、翌日、新しき村社に手紙を出し、一円二〇銭送金している。この間、白樺派文芸を推挽した『芸術上の理想主義』（赤木桁平著、一九一六年十月、洛陽堂）も読んでいる。この熱心さは、やはり普通ではない。以上の様子から言えば、『白樺』からは一度はなれ、『或る青年の夢』を読んで感銘を受けてから、改めて武者小路実篤に共鳴したと見るのが順当なところだろう。十月末に江馬修の『小さい一人』（『寂しき道』所収、一九一七年三月、新潮社）を翻訳し、十一月には新しき村から送られてきた雑誌三冊、説明および会則一冊、また『新しき村』十一月号を受け取っている。周作人が『人的文学』（十二月五〜七日執筆）以下の諸篇を書き出すのは、実はこれ以降なのである。つまり、『人的文学』以降本格的に始まる人道主義啓蒙活動の出発からして、武者小路実篤とその新しき村運動の強い触発下にあったわけであり、周作人のこの時期の活動全体に対する相当の影響関係を想定しないわけにはいかない。細かい腑分けの作業は今ではできないけれども、少なくとも言えることは、周作人の「新村運動」を他の文芸面での活動と切り離して考えることはできず、一体として見るべきだということ、そして、『或る青年の夢』が周作人に与えたショックがいかに大きかったか、この作品の周作人における意味は日本の反戦文学の単なる紹介などという次元のものでは到底なかったであろう、ということである。

さて、その周作人が「新しき村」を初めて紹介したのは、〈読武者小路君所作一個青年的夢〉発表の十か月後の『新青年』第六卷三号（一九一九年三月）に掲載された〈日本の新村〉であった。これは、〈人的文学〉〈平民的文学〉〈祖先崇拜〉〈思想革命〉など当時の文学運動および新文化運動をリードした一連の輝かしい文章、そして、この時期の口語詩のなかでは評価の高い、周作人自身満足に思っているらしい、しかも「新村運動」と深い関係にある長詩〈小河〉および数首の詩<sup>(4)</sup>などのあとに書かれている。

〈日本の新村〉は、武者小路実篤の『新しき村の生活』（一九一八年八月、新潮社）および『新しき村の説明』（『新しき村の説明と精神及会則』一九一九年二月、東京支部発行）と雑誌『新しき村』（一九一八年七月より）からテーマごとに数多く抜粋翻訳し、これにコメントを付け加えた文章である。まず、これはユートピアの理想を実現しようとするものであるが、資本が無くて消滅した英国コールリッジの構想や、労働のみを重んじ極端な利他を要求したトルストイの試みとは異なり、「脳の仕事」も同時に重んじ、また個性を賛美し自由の精神を重んじるものであるから確かに実行可能であり、既に昨年の冬に新しき村を作って「人間らしい生活」を始めている、と述べ、これは人類共同の意志の表現であるから、人々が真に望みさえすればこのような社会は必ずや実現するであろうし実現させねばならない、と概括する。そして、(1)この試みが「遅かれ早かれ世界的革命はきつと発生する」という歴史認識を前提に、無用な破壊損失を免れて必然の潮流にしたがい新社会の基礎を建立し、遠い将来には次第に広がって大同社会が成立することを期待するものであること、(2)「人間らしい生活」とは、人類の義務として、同時に自己発展の必要な手段として、健康なものであれば全員が労働をして階級の差をなくし、協力と自由、互助と独立を基本精神とするもので、(3)生物現象上では生存競争を認めるが、人類の生活では必要ない、とま



とめたりえで、試めを始めた日向の新しき村の具体的な生活の様子を紹介し、現在のところ多くの誤解を免れえないが真実を解ってもらえばそれも解消されよう、ただ、誤った思想にしがみつくと政治家・道徳家・文筆家などの連中が覚醒することは難しかろうが、と一文を結んでいる。

ここでは、過去のユートピア理想の失敗例を一応考慮して、今度は超人的な要求をしないから実行可能であると断っていること、〈読武者小路……〉に見られた及び腰はすでになく、理想実現の強い意欲が表明されていることが見てとれる。後者について、すでに〈人的文学〉の中の「思想道理には、是非の別があるだけで、新旧の別などない」「真理は永遠の存在で、時間による制約はない」「人類の運命は同一であるがゆえに、自分の運命を慮ると同時に人類共同の運命を慮らねばならない。よって、我々は時代を言うだけでなく、中外を分かつことはできない」などの言葉に、真理に身を寄せた自信に満ちたものの言い方が見られ、翌年春の〈新文学的要求〉では「この新時代の文学家は「偶像破壊者」である。しかし、彼は彼の新宗教がある——人道主義の理想が彼の信仰であり、人類の意志がつまり彼の神である」という昂ぶった表現でこの講演を終えていることが思い起こされる。このような、ためらいを捨てた、いかにも啓蒙家らしい或いは宗教家らしいものの言い方をするにつけては、その理念を心底信じているほかに、二つの条件が必要であつただろう。一つは、〈読武者小路……〉に見られた民衆の覚醒に対する疑いの念が解決されることである。これについては、とりわけ五四運動後では相当の希望をもったと言つてよからう。すべての知識人がそうだったと言つてもよい。周作人の資質の特徴に「知」に偏するところがあると知られているが、〈読武者小路……〉でも「現在の中国の民衆は……理解できるだろうか？ ……理解さえできればやれる」と、理解と実行とを直結した論理が見られた。この一文でも「その村人の誤解は、真相が解れば自然に消える」と、今度は肯定的な響きで人の理性に期待をかける。この実行と直結した論理的前提をもつ人間の理性への期待を維持するために、周作人はしばらく苦心を重ねることになり、そしてのちに啓蒙家を廃業する際の主要な要因ともなつた。

もう一つは、ためらいを押しなご提言させる切迫感である。この文章の始めから、武者小路実篤の、新時代がきつと来る、世界的革命が早晩起こる、という言葉を用いて、「新村運動とは、この人間らしい生活を提唱実行することである。必然の潮流に従い、新社会の基礎を築き、もって将来の革命を免れ、無用の破壊損失を省かんとするものである」と、「不流血の革命」論を提出している。当時のこの種の革命間近という切迫感、日中を問わず相当のものであったらしい。有島武郎のことはよく知られている。武者小路実篤にせよ、周作人が引用するが如く、明瞭にもっていた。彼が新しき村を作ったのはロシア十月革命の翌年のことであるが、そのおそくとも二年前には革命の必至を予想していたことが指摘されている。<sup>(5)</sup>このような一種の時代の雰囲気というものは、知らず知らず多くの人の心に深い影響を与えているものである。中国の場合でも、ロシア革命が何を目指したものであったのか、どういう様子であったのか、まともな報告紹介がなされる前から、一種の時代の雰囲気というものは濃厚に漂っていたはずである。魯迅の雜感文〈隨感錄五十六〉来丁く（一九一九年五月）などはそのような一種の動揺感を伝えている。

先に触れておいた口語体長詩〈小河〉（《新青年》第六卷第二号、一九一九年二月）のモチーフがまさにこの切迫感であった。後年、回想録で「新村運動」について語るときも、周作人はまずこの〈小河〉を引用して、伝統的発想に習って民を水に比し、その氾濫の危惧を述べたものであると説明している。そして、新しき村の創始者の熱心気魄に敬服し且つは「あの種の、革命を期待しながらまた憂慮も抱くという心情が、ここにおいていささか慰めを得ることができる」が故に宣揚したのだと書いている。この爆発しないではないはずの非人間的な現実社会の矛盾を、できれば流血を避けて解決したいというのが、武者小路実篤の試みの出発点であったわけだが、周作人はその面をより強くより明瞭に打ち出した。同年一〇月の〈訪日本新村記〉でも繰り返し、翌年六月の講演〈新村の理想と実際〉では更に明瞭に、同じ社会の根本的改革を目的とする他の二派、優生学家および激烈な社会主義者と対比して述べている。この「不流血の革命」論は現在の中国の研究者から

手酷く批判されている。<sup>(7)</sup> 甘ったるい「愛」の説教であるとか、階級調和論であるとか、プチブル知識分子の強大な革命の潮流に対する本能的恐怖であるとか、伝統的な中庸の思想の発現であるとか、現代の革命の進行を阻害した一種の反動思想となったとか。また、周作人日本留学時の主要な論文〈論文章之意義暨其使命因及中国近時論文之失〉(《河南》第四、五期。一九〇八年五、六月)にもすでにその傾向が見られること、のちに「儒家」を称し中庸的精神のもちょうを説いたこととも関連させて論じられている。もっとも、以前のような問答無用の断罪ではなく、本人の主観的善意や当時果たした「一定」の積極的作用(特に文学・倫理・反封建の面における)をそれなりに高く評価しつつであるけれども。

ここで、周作人の社会主義および無政府主義に対する見方について、多少紹介しておく。周作人の社会思想は理念的には社会主義であったと言ってよい。〈人的文学〉に先立つ二篇の短評〈随感録三十四〉(《談龍集》所收時に〈愛的成年〉と改題)と〈文学改良与孔教〉に、すでに次の言葉がある。前文は、エドワード・カーペンタの《愛的成年》(“Love's Coming-of-age”)を紹介しつつ、ハブロック・エリスなども引用して、女性問題と性の問題をのべたもので、当時の胡適や李大釗らと比べて——あるいは現在の中国から見ても——頭抜けて高いレベルをもっていた。その意味を理解できる人はほとんどいなかったのではないかと思われる——あるいは今の中国でも多くはないだろう——。この中で、女性解放には経済的独立が必須であることは当然の道理であるが、現在の社会制度ではそれは根本的には不可能であると言って、カーペンタの「商業制度——人類の労働や人類の愛情を交易売買する制度——を完全に覆して、別に一種の新理想新習俗を実現したときでなければ、女性是真的自由を得ることができない」「女性の自由は、結局、社会の共産制度を基礎にするしかない」などの言葉を紹介している。後者の一文は、来信に答えるものだが、そのなかで「男女問題の円満なる解決は、固り共産時代でなければ成功し難いが、しかし局部的解決は現在でも実現できる。……もし、将来に必ずや決着することを予想するがゆえに今この時口を開かないというのであれば、……万々話にならない」と言っている。<sup>(8)</sup> 「商業主義」(＝資本主義?)の非人間

性の認識と、その克服の方向としての共産制度のイメージをもっていたことがわかる。「新村運動」はむしろ共産主義である。のちの文章〈外行的按語〉（一九二六年二月、《談虎集 上》所収）では、「現在いささかでも知識のある人で（いわゆる知識階級ではなく）、共産主義に賛成しない者は当然ないと、私は信じている」「浄土、天国、蓬莱、ユートピア、無何有之郷、みなこのような一個の共産社会である。共産主義者はまさに彼ら（真正の宗教家——筆者注）とあい似た宗教家であつて、彼らより幾分性急に、地上に天国を建てんと考えているのだ。……総じて、現代の空気を吸っている者は、……を除けば、たいてい皆が共産主義者に賛成している」「日本日向地方の新しき村は純粹の共産的生活である」と言っている。彼の共産主義のイメージがおおよそ見て取れるであろう。マルクス主義ないしはボルシェヴィズムについては、前に見たように「激烈な社会主義」と表現したりして、時期により若干の揺れがあるが、基本的には彼の言う共産主義の一派として見ている。詳しくは後でまた検討する。

無政府主義についても、共産主義の一派として見る点では同じである。特にクロボトキンについては少々縁が深い。早く、日本留学中に彼の一文「シベリア紀行」を翻訳した（《民報》第二四号、一九〇八年一〇月）ことがあり、《日記》一九二〇年一月一六日の項には「《新生命》誌のために「クロボトキンの文学観」を執筆、夜に至つて了る」とあり、さきの〈外行的按語〉では「『互助論』にはざつと目を通したことがある」と言い、互助と階級闘争の關係を論じている。「新村運動」でも「互助」つまり「おのおの人の力の及ぶところ尽くし、人と事との必要とするものを取る」は基本精神であつた。総じて好意的で、かなりの影響を受けていると言つていいだろう。このほか、日本留学中、無政府主義者劉師培の主宰する雑誌《天義報》に〈論俄国革命与虚無主義之別〉（一九〇七年一月）と題する論文を発表しており、また、《日記》一九一八年一月一八日の項には「虚無思想の研究」（生田春月著、天弦堂書房、一九一六年四月）を購入したことが記されている。若し無政府主義者と親しくしていたことも《日記》から読み取れる。これも（下）で述べる。

周作人は、一九一九年七月、五四運動の波がひとあたり落ち着いた後、東京へ行くついでに十日あまりかけて、日向の新しき村および大阪・東京ほかの各支部を訪れた。そのときの記録と印象を、東京についてほとんどなく文章にしたのが「訪日本新村記」(《新潮》第二巻第一号、一九一九年一〇月)である。まず、日向までの紀行を期待に溢れてたどったらしいそのままに記し、迎えに来た青年との出会いで大いに感激したことを記し、実篤の出迎えも受けて共に雨の中夜道をたどってような思いで武者小路宅に着くまで、四日間の滞在とその間の半日の労働の愉快であったこと、新しき村の組織と実際の紹介、理想の実現性の証しとなる喜びをおおよそ感じたことを記し、さらに大阪・京都・浜松・東京の各支部を訪れて、結果この運動の大略を了解したことを記し、人は知りあうことで相互理解が可能であることを強調したうえで、「この度の旅行は、何か得たものがあつたとは言えないが、思想上においては、これによりいくらか暗い影を払いのけて、自分の理想に対し幾分勇氣を増した。これはみな私の受けた利益であつて、感謝せねばならない」と書いている。この最後の部分はやや解りにくい。武者小路の理想と自分の理想とが原則的には別のもので、共通する人間の理性への信頼の点で大きな励ましを得た、と言い換えていいものだろうか。そうだとすれば、周作人が単に武者小路に同調したのではなく、中国という場で自分の理想を考えていたことを示唆している、解していいことにならう。

前に見た、理性への信頼と「不流血の革命論」について、文中次の言葉がある。

……一般の冷淡と誤解も免れ難い。しかし、私は、新しき村の精神が決して誤つてはいないこと、たとえ万一失敗したとしても、その罪はこの理想の不十分さではなく、人間の理性の不成熟にこそあると、深く信じている。「来るものは、どうあつても来る」とはいえ、準備が異なれば結果も大きく違ってくる。新しき村の人たちは、これまで

暴力でしか実現できなかったことを平和的方法で手にいれようとしているのだ。……中国の……社会情勢と歴史事跡とを見れば、危険は極大である。暴力は絶対に利用してはいけない。故に私は、新村運動に対し、人類の一部分としての中国の<sup>(12)</sup>ためを思って、より一層心から賛成するのである。

ここには、失敗の可能性、人間の理性の不成熟がありうる、中国という場を見ている、中国では暴力革命の危険が切迫している、という周作人の認識が見える。すぐ前の引用部分と対照すると、先ほどの推測がある程度補強されるようである。ともかくも、「幾分勇気を増した」という言葉の意味が、人間の理性の不成熟への不安が幾分薄らいだということ<sup>(13)</sup>を言っているのであると解る。もう一点、五四運動の与えた衝撃（それ自体は必ずしも恐怖ではなかったはずだ）が大きかったこと、それにより「切迫感」が一層強くなっていることが解る。

周作人を評する人は、よく、彼の大衆運動に対する鈍感さを言う。辛亥革命、五四運動、五三〇運動、三一八事件などなどについて。しかし、文章はやはり丁寧に読んでみなければわからない。とくに周作人のような人の場合は。私には、彼がそれぞれの場面で鈍感であったとは思えない。むしろ、センチティブすぎたのではなかったかと思うことが多い。このことについては、それぞれの場面で分析をしなければならぬ<sup>(14)</sup>。ここでは、五四運動に対する周作人の反応がこのような形で見られることを指摘しておけばよい。

以上の紹介では、問題点に話を絞っているために、この文章の全体的印象とは多少ずれがあつて、全体としてはよく言われる通り、興奮と喜びで一人舞い上がっていると評している。半日の労働で、三十余年来かつてなかった充実を感じ、「人間らしい生活」の幸福を知ったなどと反語でなく言うのは、本来の周作人の文章らしくない。魯迅がこの文章を評価しなかったのはもつともなことであつた<sup>(15)</sup>。

同年八月一〇日に北京に帰った周作人は、《日記》によればこれ以後しばらくのあいだ、武者小路および新しき村の友人

らと頻繁に手紙の交換をし、また写真を送りあったりしている。また、二週間後、〈游日本雜感〉（《新青年》第六卷第六号、一九一九年十一月）と題する一文を書き、いくつかの現象を挙げて日本が武力主義に走る危険を案じながらも、それは民衆とは係わりなく、民衆はある意味で被侵略者であると言っている。また、大戦後の成金の続出、物価騰貴、生活困難、階級格差の拡大、ストライキなどを紹介し、「日本では近来、労働問題についても次第に注意を払うようになってきたが、幾人かの公正で賢明な人（政府および資本家あるいは危険人物と見成しているかも知れないが）以外、多くはまだいわゆる温情主義を迷信していて、多少「仁政」を行って彼らが恩に感じて騒がなくなることを期待しているが、この種の時代遅れの方策は、恐らく何の効果も持たないであろう」とも書いている。まさきり社会主義者の口吻ではないか。一方、新人会などの動きも紹介し、日本が、儒教的封建あるいはプロシヤ的強国以外の第三の道を歩む期待も表明している。ストライキでは新聞印刷工のストが敗北したことを伝えている。また、同時期に書かれた口語詩に〈東京炮兵工廠同盟罷工〉（同前所載）があり、同年八月に一週間にわたって続けられ、大きな反響を呼んだこのストライキに強く同情の意を表している。日本の労働人民はわが友という考えからの表現であろう。

この《新青年》第六卷第六号には、〈答袁滄昌君〉という周作人の書信も掲載されている。日向の新しき村に入りたいと言ってきたのだろう、今は日本人も入り切れないでいるから、援助する第二種会員になるか、中国に新村を作るのだが、どちらも結構、と答えている。このあたりから、《日記》に、全国各地から手紙がきて返事を出すという記載が見え始める。そして、一月二三～二四日の上海《民国日報》副刊《覚悟》に、天津での講演録〈新村的精神〉が掲載されると、その種の記載がどっと増えている。やはり、知識人に歓迎されていたとはいえ、進歩的雑誌の影響力は大きなわななかったということであろうか。《覚悟》は上海論壇の進歩派の中心紙であった。ともかく、これにより周作人の社会的名声は飛躍的に高まり広がったものと推測される。

講演は、九月に予定が決まり、十一月八日、天津学術講演会で行われた。まず、新村の思想は、経済学説に基礎を置く某派社会主義には属さないこと、精神上道徳上の影響が大であること、協力と自由、互助と独立を生活の根本とし、二つの原則、(1)各人労働の義務を尽くして、健康生活上必要な衣食住を無代価で取得すること、(2)一切の人は平等で人類に対する義務を尽くすが、また自己の個性を十分に発展させること、をよく了解すれば、耕作に従事しなくても正当な新人に恥じぬものである、と簡略化して述べる。具体的な実行方法として新しき村の会則を紹介し、現在の新しき村は、一見したところ普通の村と変わりはないが、一種の平和で幸福な雰囲気のあるところが他と異なる、目下は農耕しかないが、図書館・美術館・音楽会・医院・学校・工場としいに建設してゆく予定である、と紹介する。あわせて、中国で近来試行されている新村に似た運動三種をとりあげて、新村との違いを説明する。その三種、(1)南京の啓新農工場有限公司は株式組織である点、(2)北京の平民新組織は組織者が指導するものであるらしい点、(3)上海龍華の新村は行政機構があつて「模範町村」をつくるものであるらしい点で、わが新村と理想が違うと言う。最後に、有力な批判の二つ、経済上の不安と理想実現の困難とを取り上げ、経済上一、二年後には自立できること、理想の実行は人の理性を信頼するしかないと言って、前前頁の「訪日本新村記」のところで引用した部分を再び引いたうえで、たとえ現状から見てもすぐには新村を建設する希望がないとしても、新村の精神を正しく理解して、旧来の誤った人生観を改め新道徳の基本を建てることのできるなら、それでも大きな利益である、と言っている。

ここで留意すべきことは、一つは、〈訪日本新村記〉ほどのトーンの高さがなく、むしろ、中国での新村建設の困難を予想して精神的態度の問題に限つてもよいと考え始めているらしいこと、もう一つは、中国での様々な試行がすでに始まっているが周作人の理想からは離れていること、である。一九一九年後半、まずは上海の《時事新報》副刊《学灯》で「新村」に関する討論がわかにもち上がり、続いて一九二〇年中、上海と北京を中心に「新村」論議が相当頻繁に交わされ



た。五四運動後のいわゆる社会主義ブームの中で「新村」のイメージが多くの青年の心を引きつけたのであった。

周作人の論立てに、まず直接批判を加えたのは胡適であった。彼は〈非個人主義的新生活〉と題する唐山での学術講演で、別個に新村を作るよりは現在の旧村を改造するよう努力するのが筋であると、正面から周作人の「新村」を批判した。これにともない、周作人の反論および他の人の反応がある。次節では、これらを見ていくことにする。

## 注

(1) 魯迅、茅盾、鄭振鐸それぞれの《新文学体系》〈小説二集・導論〉、〈小説一集・導論〉、〈文学論争集・導論〉(一九三五―六年、上海良友圖書印刷公司)にまずよく表れている。そのほか、魯迅では〈為「俄国歌劇団」へ呐喊自序〉《自選集》自序など多数。茅盾では〈評四五月の創作〉などの《小説月報》誌上の短評、鄭振鐸では、〈雜譚・血与泪的文学〉などの《文学旬刊》誌上の短評、などに見られる。

(2) 細谷草子「五・四新文学の理念と白樺派の人道主義」《野草》第六号、一九七二年一月。氏は、婦人と子供の人格の独立の問題を周作人が見通していた点で白樺派より一歩進んでいたと評価している。ただ、周作人と武者小路実篤がどこまで重なっていたかは、慎重に見ていく必要がある、「一歩進んでいた」と言っているいかどうか解らない。発想が普遍性へ傾くという点では、周作人と武者小路実篤に似たところがあるかも知れないが、全体としては資質はかなり異なっている。周作人の主要な特性に冷静透徹さを挙げるべきなのだから。この二三年の「新村運動」に熱中した時期が、彼自身のちに「浮躁凌厲(激しく上調子)」であったと述懐することになる異常な時期であった。なお、山田敬三氏も『魯迅の世界』(大修館書店、一九七七年)の「魯迅と「白樺派」の作家たち」で周氏兄弟の武者小路実篤受容の諸相につき論じられておられる。しかし、少なくとも周作人に関しては評価に賛成できないところが多い。中国民衆の覚醒のために紹介したという点で、周作人はべつに魯迅とそう離れた所にいたわけではないし、資質が武者小路実篤に近かったわけでもない。また、周氏兄弟特に魯迅と武者小路の関係については、藤井省三『魯迅「故郷」の風景』(平凡社選書、一九八六年)第二章にも詳しい論考がある。資料の豊富さもあって大いに参考になったが、氏の武者小路への評価、周氏兄弟特に魯迅の受容のしかた、また、思想状況に対する兄弟の反応などの点につき、筆者も解釈の方向は同じくするのであるが、その結論については、やや強引な拡大解釈があるように思われ、中々に賛同しがたい。

(3) 『周作人日記』は次の二誌に掲載されている。一九八八年から一九一五年までは、『魯迅研究資料』第八号（北京魯迅博物館発行、一九八一年五月）から第一四号（一九八四年一月）までの各号に。一九一七年から一九二一年までは、『新文学史料』（人民文学出版社発行）一九八三年三期から一九八四年第四期までの各号に。一九二六年の分は存在しており整理済みのはずであるが、既刊の『魯迅研究資料』第一五号第一六号には掲載されていない。

(4) 周作人の口語詩は（兩個掃雪的人）（一九一九年一月作）から始まっているが、その前の年に短評（勃来克的詩）（ブレイクの詩）を書いている。ただ、『日記』を見ると、一八八八年一月、つまり詩作開始の直前に生田春月著『新しい詩の作り方』（春陽堂、一九一八年）を読んでいる。同年九月に上海で『新詩ノ作り方』を買ったと記載があるのと同じ本であろう（七月に東京から入手した『新ラシイ詩』は異なる本ではなからうか。一二月には朱邊先（希祖）に貸している。朱に本を貸すのは一〇月末に一ヶ月を限って貸した『新しき村の生活』に次いでのことである。朱からは数度『早稲田文学』を借りている。周作人の口語詩は、当時の未熟な水準のなかで、旧詩詞のセンスを抜け出して口語詩らしい自然で清新な詩風を作り得たと、相当高く評価されている。その自然さ清新さに、『新詩の作り方』が作用していないであろうか。もちろん、無邪気な即興詩風の武者小路実篤の詩の影響も当然考えたい。周作人の一九二一年に数多く書かれた口語詩は、さらに武者小路実篤の詩に似た素直さを持つている。

(5) 武者小路実篤が「或人は云った」『白樺』大正四年（一九一五年六月）に「如何にして来るものを平和に來させるかが問題なのだ」と書いていることを取り上げて、大津山国夫氏が『新しき村の創造』（富山房百科文庫、一九七七年）「解説」で、こう書いている。

(6) 周作人『知堂回想録』（聴濤出版社、一九七〇年）へ一三〇～一三二 小河与新村（上）（中）（下）。おもしろいことに、「新村」の説明をする際に、運動提唱時に引用したのとはほぼ同じ武者小路実篤の文章を再び多段にわたり引用している。「抄文公」らしいと言えよそれまでだが、この理想をなお本当は信奉しているのだとも言いたげである。

(7) 銭理群（試論魯迅与周作人の思想發展道路）（『中国現代文学研究叢刊』一九八一年第四期所載）第三節や、李景彬『周作人評析』（陝西人民出版社、一九八六年四月）第四章、など。

(8) 周作人の女性論については、木原葉子「周作人と與謝野晶子——「貞操論」・「愛の創作」を中心に」（『東京女子大学日本文学』第六八号、一九八七年九月）が、與謝野晶子と対比しつつまとめている。周作人の思想全体において、その女性論が大きな意味をもっていることも指摘されている。

(9) 「クログトキンの文学観」は逸文で、内容は解らない。詳細な『周作人年譜』（張菊香・張鉄榮共著、南開大学出版社、一九八五年

九月)にも、現在最も詳しい(著訳系年)(《周作人研究資料 下》所収、張菊香・張鉄榮共著、天津人民出版社、一九八六年一月)にも録していない。

(10) 《訪日本新村記》および周作人の新しき村訪問については、飯塚朗「周作人・小河・新村」(《関西大学東西学術研究所紀要》第八号所載、一九七五年十二月)、『新しき村』への道——周作人の足跡をたどって——(同第九号所載、一九七七年三月)が詳しく紹介している。前者はまた、周作人の新村関係の文章および《知堂回想録》の関係部分を紹介している。

(11) 三一八事件については、木山英雄「正岡子規と魯迅、周作人」(《近代文学における中国と日本》所収、汲古書院、一九八六年一月)が、主に彼の「奇矯」な文章《死法》の丁寧な分析を通じて、彼なりにセンシティブでありながら表現のレヴェルでは露な書き方をしなかったことを解き明かしている。

(12) 魯迅書信《致錢玄同》一九一九年八月一三日(《魯迅全集》第十一卷所収)。錢理群氏がこれを指摘して、魯迅が空想に酔わなかったことを強調している(前掲論文)。